

飯南町の古代集落、だれが住んでいた？上ノ谷遺跡(飯南町)

調査年：2019～2020年 鈴木七奈

島根県に採用されて1年目の令和2年初夏、私は飯南町来島地区に所在する、上ノ谷遺跡の発掘調査に参加しました。

「何だ、この真っ黒な土の遺跡は…!？」面食らったのは、遺跡を覆う一面の黒色土でした。黒色土は、三瓶山から降下した火山灰に由来するもので、火山灰に含まれる火山ガラスの風化の過程で形成されます。黒色の地面に掘りこまれた遺構が全く見えず、先輩職員に何度もアドバイスをを受けて、ひたすら地面を削りました。

この遺跡では、古墳時代中期(5世紀)の竪穴建物1棟、古墳時代後期後半(6世紀後半)の竪穴建物3棟からなる集落が見つかりました。竪穴建物とは、地面を円形または方形に掘って床面を作り、そこに柱を立てて骨組みを作った後、屋根をかけた建物です。この建物は、主に住居として利用されました。

上ノ谷遺跡のある場所は、山の間にある小さな谷地形で、中央には小川が流れています。



黒い土に掘り込まれた竪穴建物を発掘している様子

しかし、現在の来島地区で人々が住んでいる場所から離れた、標高のやや高い位置にあり、一見するとあまり住みやすい場所に思えません。どうしてここに昔の人々が居を構えたのか、調査後もずっと考えていました。そこで、上ノ谷遺跡にどんな人々が住んでいたのか、何故この場所を選んで住み始めたのかを明らかにするために、まずは周辺地域で同時期に営まれた集落を調べてみました。

飯南町内には、志津見地区・八神地区・角井地区・頓原地区において弥生時代～奈良時代初頭に営まれた集落の遺跡が複数発見されています。これらの集落における時期ごとの竪穴建物の数を調べてみると、古墳時代後期後半から数が急増していることが分かりました。上ノ谷遺跡においても、古墳時代中期は1棟しかなかった竪穴建物が、古墳時代後期後半では3棟に増えています。他にも、出土した土器の種類や竪穴建物の規格・立地などから、上ノ谷遺跡の集落は孤立して存在するのではなく、周辺地域の集落と連動して形成された可能性が高いと考えました。竪穴建物の数が急増する古墳時代後期後半から、山間部の開発が大きく進んだのではないのでしょうか。

しかし、建物の数が増えたということは人口も増加しているということです。どのようにして人口が増えたかについては、平野部や周辺地域からの移住の可能性も考慮しながらも、今後検討しなければならない重要な課題です。報告書作成に向けた整理作業により上ノ谷遺跡や周辺集落にどんな人々が住んでいたのか、その謎に迫っていきたいと思います。

(島根県埋蔵文化財調査センター 主任主事)



上空からみた上ノ谷遺跡

遺跡全体が黒い土であることがわかる